



- 第1節 成績観・学力観
- 第2節 勉強の効用
- 第3節 社会観・将来観
- 第4節 興味・関心の広がり
- 第5節 学習の悩み
- 第6節 自分自身の成績に対する見方

ベネッセ教育総合研究所 特任研究員 太田昌志

序章

第1章

第2章

第3章

第4章

第5章

資料編

1

成績観・学力観

小・中・高校生ともに「今は勉強することが一番大切なことだ」「できるだけいい高校や大学に入れるよう、成績を上げたい」が増加し、「学校生活が楽しければ、成績にはこだわらない」が減少している。勉強は大切で成績を上げたいという意識が、小・中・高校生に広がっている。

本章では、小・中・高校生の学習に関する意識がどのように変化しているかを検討する。本節では、成績や学力をどのように考えているかをみていく。

●勉強は大切で成績を上げたいという意識が広がる

図4-1-1は小・中・高校生について、成績や学力をどのように考えているかを示している。小・中・高校生とも勉強は大切で成績を上げたいという意識が2015年でもっとも広がっていることがわかる。

小学生についてみると、「今は勉強することが一番大切なことだ」がもっとも少ない2001年と比べて9.1ポイント増加し49.6%、「できるだけいい高校や大学に入れるよう、成せきを上げたい」がもっとも少ない2001年と比べて7.6ポイント増加し74.6%となっている。また、「学校生活が楽しければ、成せきにはこだわらない」がもっとも多い2001年と比べて14.2ポイント減少し21.2%となっている。

中学生についてみると、「今は勉強することが一番大切なことだ」がもっとも少ない2001年と比べて15.1ポイント増加し39.6%、「できるだけいい高校や大学に入れ

るよう、成績を上げたい」がもっとも少ない1996年と比べて10.8ポイント増加し67.2%となっている。また、「学校生活が楽しければ、成績にはこだわらない」がもっとも多い1996年と比べて11.7ポイント減少し22.0%となっている。

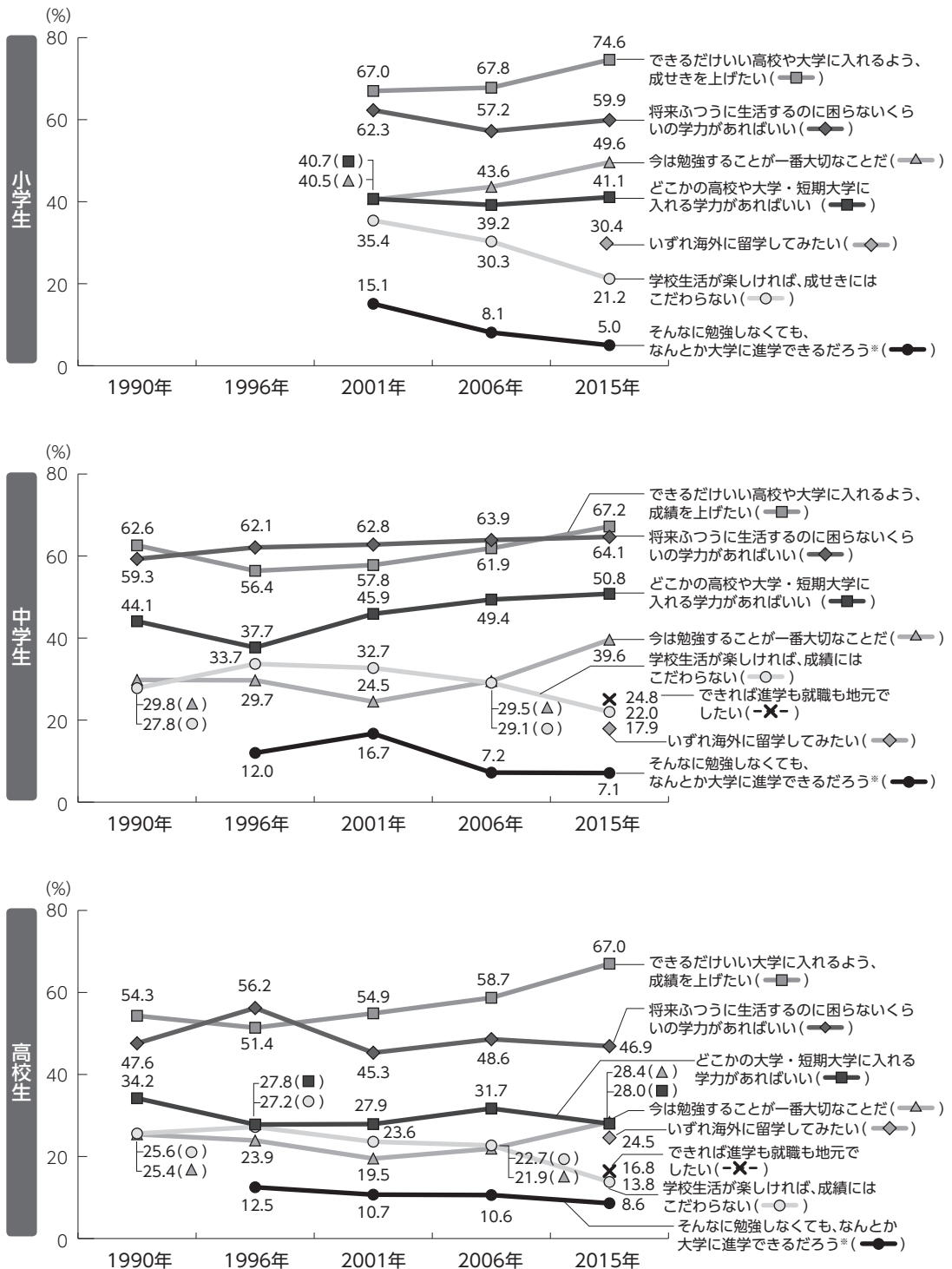
高校生についてみると、「今は勉強することが一番大切なことだ」がもっとも少ない2001年と比べて8.9ポイント増加し28.4%、「できるだけいい大学に入れるよう、成績を上げたい」がもっとも少ない1996年と比べて15.6ポイント増加し67.0%となっている。また、「学校生活が楽しければ、成績にはこだわらない」がもっとも多い1996年と比べて13.4ポイント減少し13.8%となっている。

●地元志向は高く中、海外志向は中<高く小

2015年には、学習に関連して地元志向や海外志向についてたずねている。これらの結果をみると、「できれば進学も就職も地元でしたい」という地元志向は高校生（16.8%）より中学生（24.8%）が高い。一方「いずれ海外に留学してみたい」という海外志向は小学生（30.4%）がもっとも高く、ついで高校生（24.5%）、中学生（17.9%）となっている。

Q あなたは、次のように思うことがありますか。

図4-1-1 成績観・学力観（小学生・中学生・高校生、経年比較）



注1) 複数回答。
 注2) ※は1996年、2001年は「そんなに勉強しなくても、なんとか進学できるだろう」としてたずねている。
 注3) グラフのない調査年はたずねていない。

2

勉強の効用

小・中・高校生とも、学校の勉強が将来の「役に立つ」という意識が2006年よりも広がっている。学校の勉強が「一流の会社に入るために」「会社や役所に入ってえらくなる(出世する)ために」といった、職業的成功の側面で「役に立つ」という意識は小・中・高校生とも8割前後に広がっている。

●学校の勉強が将来の「役に立つ」という意識が広がっている

図4-2-1は小学生について、図4-2-2は中学生について、図4-2-3は高校生について、学校の勉強がどのように「役に立つ」と考えているかを示している。

はじめに小学生をみていこう(図4-2-1)。2015年の結果をみると、「社会に出て困らない知識を身につけるために」(89.9%)、「とても役に立つ」+「まあ役に立つ」、以下同)、「よいお父さん、お母さんになるために」(89.3%)、「社会で役に立つ人になるために」(88.2%)、「心にゆとりがある幸せな生活を送るために」(86.4%)、「一流の会社に入るために」(85.2%)、「尊敬される人になるために」(81.0%)、「しゅみやスポーツなどで楽しく生活するために」(80.6%)、「科学の発展や技術の進歩のために」(80.4%)について8割以上の小学生が「役に立つ」と回答している。2006年と2015年に継続して調査している項目をみると、「お金持ちになるために」が10.0ポイント増加、「会社や役所に入ってえらくなる(出世する)ために」が9.6ポイント増加など、将来の成功や生活のために学校の勉強が将来「役に立つ」という意識が広がっている。

次に中学生をみていこう(図4-2-2)。2015年の結果をみると、「社会に出て困らない知識を身につけるために」(90.8%)、「社会で役に立つ人になるために」(86.2%)、「一流の会社に入るために」(83.4%)、「会社や

役所に入ってえらくなる(出世する)ために」(81.4%)、「尊敬される人になるために」(80.9%)、「心にゆとりがある幸せな生活を送るために」(80.4%)、「科学の発展や技術の進歩のために」(80.0%)について8割以上の中学生が「役に立つ」と回答している。2006年からの変化をみると、「お金持ちになるために」が11.4ポイント増加、「よいお父さん、お母さんになるために」が11.1ポイント増加など、将来の成功や生活のために学校の勉強が将来「役に立つ」という意識が広がっている。

次に高校生をみていこう(図4-2-3)。2015年の結果をみると、「社会に出て困らない知識を身につけるために」(88.1%)、「一流の会社に入るために」(84.4%)、「科学の発展や技術の進歩のために」(84.4%)、「社会で役に立つ人になるために」(81.7%)について8割以上の高校生が「役に立つ」と回答している。2006年からの変化をみると、「心にゆとりがある幸せな生活を送るために」が15.4ポイント増加、「よいお父さん、お母さんになるために」が14.1ポイント増加など、将来の成功や生活のために学校の勉強が将来の「役に立つ」という意識が広がっている。

●小・中・高校生の比較

ここまで小・中・高校生それぞれについて、学校の勉強は将来の「役に立つ」かという意識をみてきた。最後に、2015年の結果につ

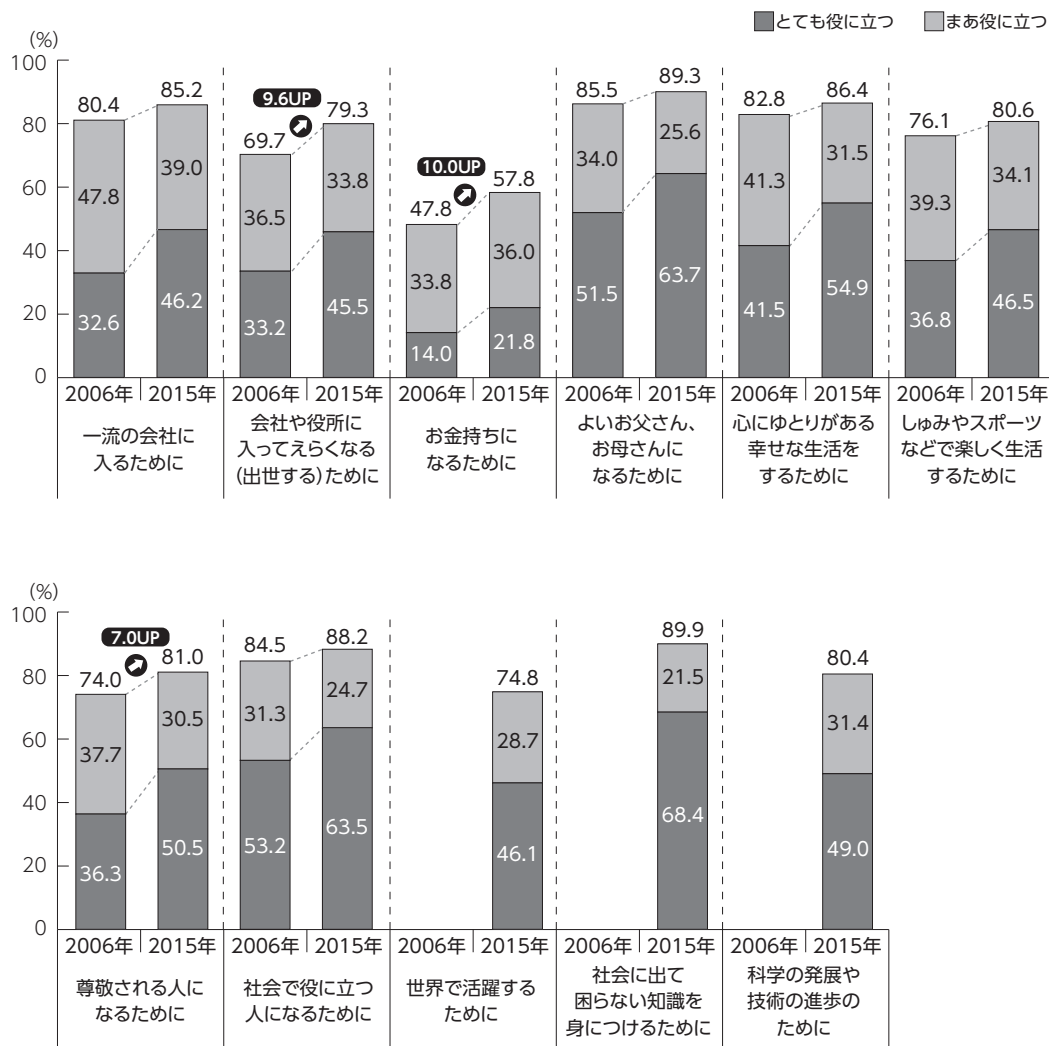
いて小・中・高校生を意識を比較する。

「よいお父さん、お母さんになるために」(小学生89.3%、中学生77.6%、高校生66.9%)、「心にゆとりがある幸せな生活をするために」(小学生86.4%、中学生80.4%、高校生73.5%)、「趣

味やスポーツなどで楽しく生活するために」(小学生80.6%、中学生69.3%、高校生56.3%)など、経済的成功や職業的成功以外の側面で将来の「役に立つ」という意識は小学生>中学生>高校生の順に持ちやすくなっている。

Q 学校の勉強は、つぎのことにどのくらい役立つと思いますか。

図4-2-1 勉強の効用 (小学生、経年比較)



注1) 2006年、2015年のみならずねている。

注2) 「世界で活躍するために」「社会に出て困らない知識を身につけるために」「科学の発展や技術の進歩のために」は2015年のみならずねている。

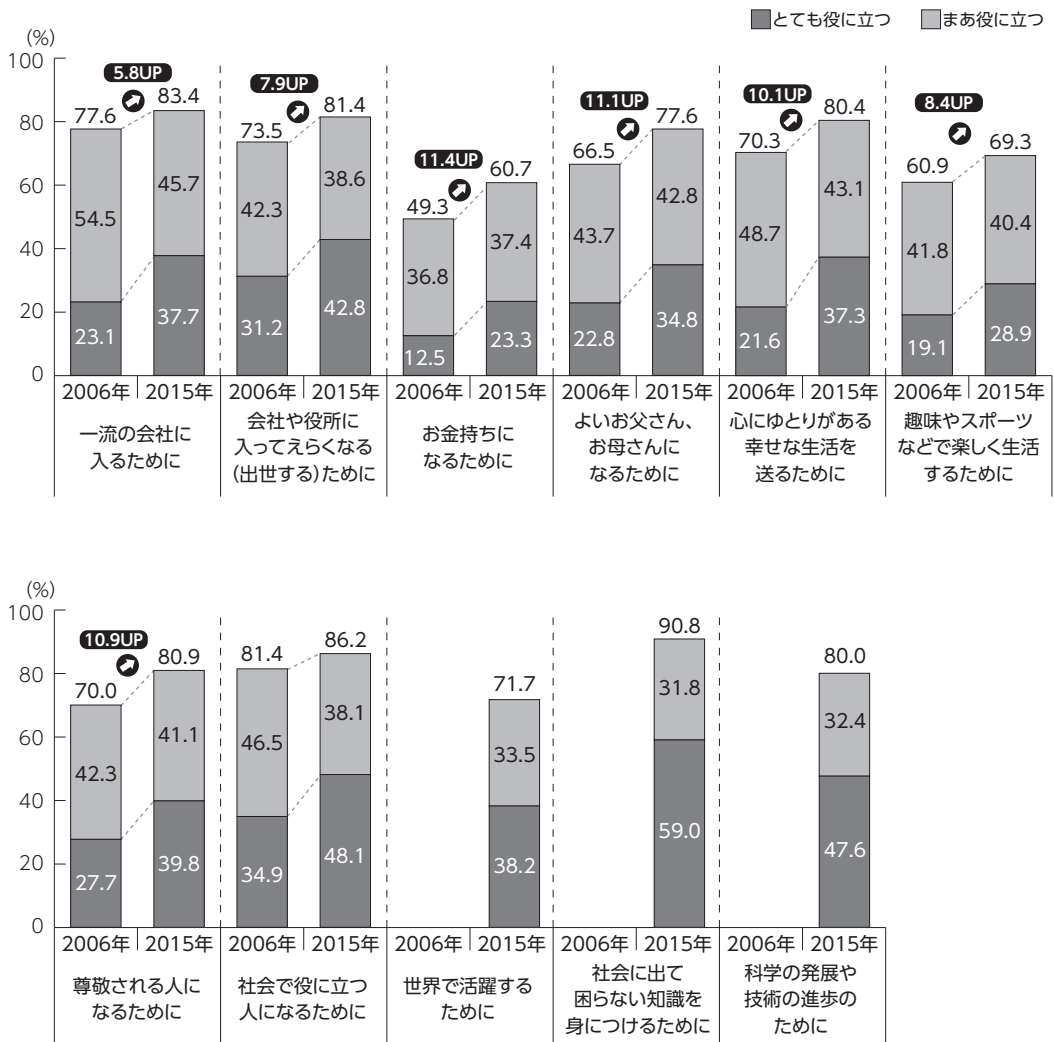
注3) ●は2006年と比べて「とても役に立つ」+「まあ役に立つ」の5.0ポイント以上の増加をあらわす。

また、「お金持ちになるために」（小学生57.8%、中学生60.7%、高校生66.8%）という、経済的成功の側面で将来の「役に立つ」という意識は小学生<中学生<高校生の順に持ちやすくなっている。

一方、「一流の会社に入るために」（小学生85.2%、中学生83.4%、高校生84.4%）、「会社や役所に入ってえらくなる（出世する）ために」（小学生79.3%、中学生81.4%、高校生79.6%）といった、職業的成功の側面で

Q 学校の勉強は、次のことにどのくらい役立つと思いますか。

図4-2-2 勉強の効用（中学生、経年比較）

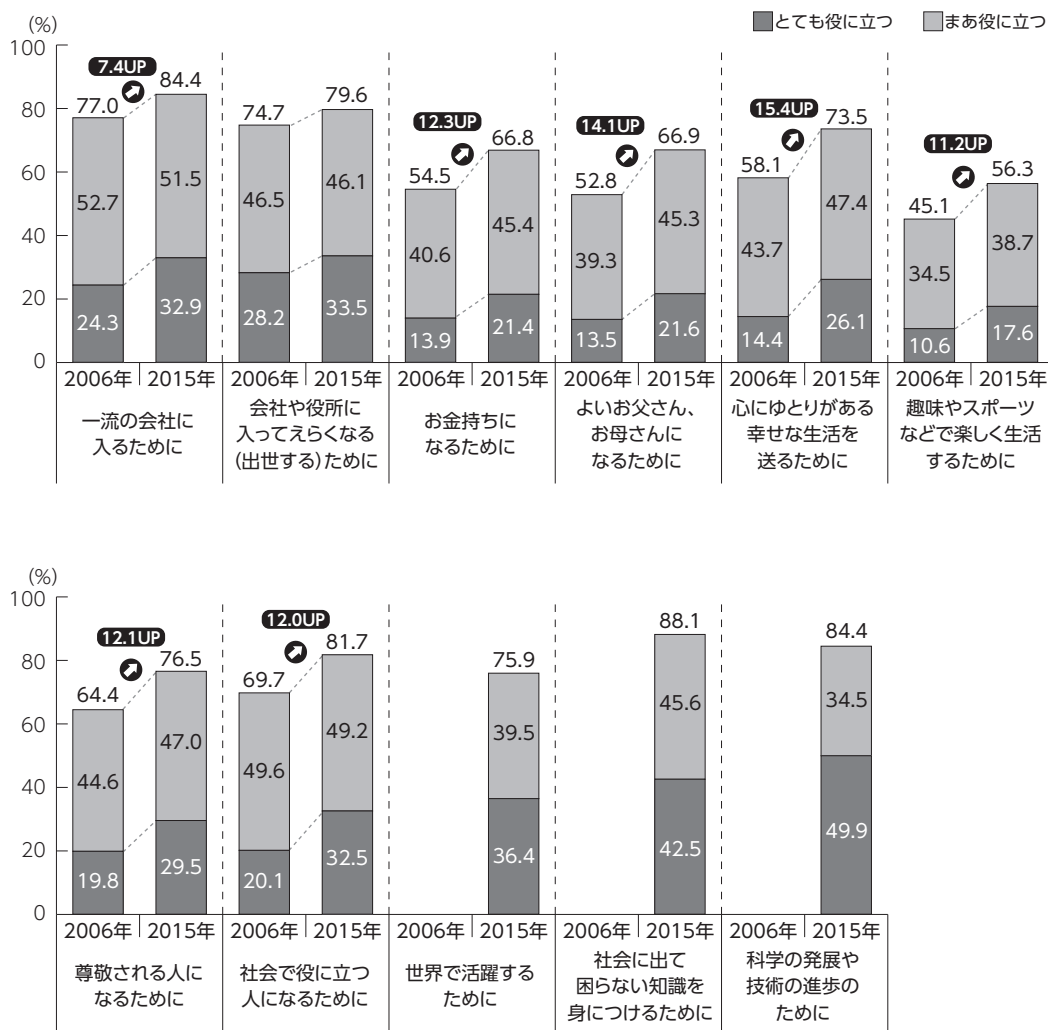


注1) 2006年、2015年のみならずねている。
 注2) 「世界で活躍するために」「社会に出て困らない知識を身につけるために」「科学の発展や技術の進歩のために」は2015年のみならずねている。
 注3) ●は2006年と比べて「とても役に立つ」+「まあ役に立つ」の5.0ポイント以上の増加をあらわす。

将来の「役に立つ」という意識は、学校段階による差が小さく、小・中・高校生とも8割前後に広がっている。

Q 学校の勉強は、次のことにどのくらい役立つと思いますか。

図4-2-3 勉強の効用（高校生、経年比較）



注1) 2006年、2015年のみたずねている。
 注2) 「世界で活躍するために」「社会に出て困らない知識を身につけるために」「科学の発展や技術の進歩のために」は2015年のみたずねている。
 注3) ●は2006年と比べて「とても役に立つ」+「まあ役に立つ」の5.0ポイント以上の増加をあらわす。

3

社会観・将来観

小・中・高校生とも「いい大学を卒業すると将来、幸せになれる」「お金がたくさんあると幸せになれる」「将来、一流の会社に入ったり、一流の仕事につきたい」という意識が2006年より広がっている。一方、「日本は、競争がはげしい社会だ」については、「そう思う」は小・中学生では増加がみられず、高校生での増加も3.1ポイントとわずかである。

本節では、小・中・高校生の社会観・将来観をみていく。本調査では、社会観・将来観を幸せの要因、地位達成や競争の意識、ジェンダー意識の3つの側面からたずねている。

● 「いい大学を卒業」「お金」によって幸せになれるという意識が広がる

幸せの要因として小・中・高校生はどのように考えているだろうか（図4-3-1）。本調査では幸せの要因として人間関係（「いい友だちがいると幸せになれる」）、学歴（「いい大学を卒業すると将来、幸せになれる」）、金銭（「お金がたくさんあると幸せになれる」）の3種類をあげてたずねている。

小・中・高校生ともに「いい友だちがいると幸せになれる」に対して「そう思う」（「とてもそう思う」＋「まあそう思う」、以下同）とする回答がもっとも多く、2015年では小学生の93.8%、中学生の93.4%、高校生の95.9%が「そう思う」としている。

一方、「いい大学を卒業すると将来、幸せになれる」「お金がたくさんあると幸せになれる」は「いい友だちがいると幸せになれる」より「そう思う」が少ないものの、2006年と比べて「そう思う」という小・中・高校生

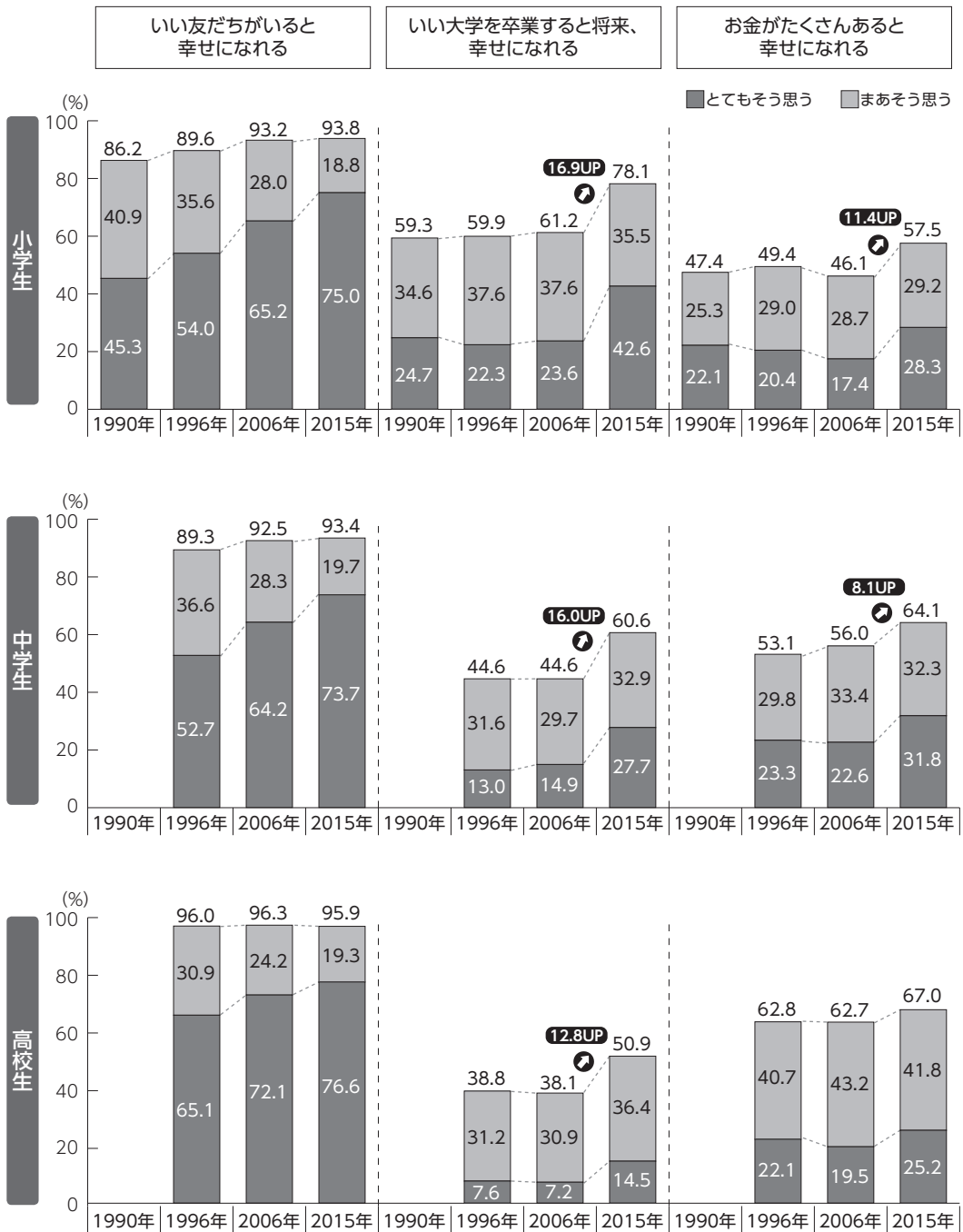
が増加している。2006年と比べて、小学生では「いい大学を卒業すると将来、幸せになれる」が16.9ポイント、「お金がたくさんあると幸せになれる」が11.4ポイント、中学生では「いい大学を卒業すると将来、幸せになれる」が16.0ポイント、「お金がたくさんあると幸せになれる」が8.1ポイント、高校生では「いい大学を卒業すると将来、幸せになれる」が12.8ポイント、「お金がたくさんあると幸せになれる」が4.3ポイント「そう思う」が増えている。

また、幸せの要因への回答においては、3項目とも「とてもそう思う」が増えている。とくに、「いい大学を卒業すると将来、幸せになれる」は「とてもそう思う」の増加が大きく、小学生で19.0ポイント、中学生で12.8ポイント、高校生で7.3ポイント増加している。

このような調査結果が、小・中・高校生の「多様な手段で幸せになることが可能な社会である」という社会観を示しているか、「さまざまな要因を持たなくては幸せになることが困難な社会である」という社会観を示しているかは判断が難しい。

Q あなたは、次の意見をどう思いますか。

図4-3-1 社会観・将来観 [幸せの要因] (小学生・中学生・高校生、経年比較)



注 1) グラフのない調査年はたずねていない。

注 2) ● は 2006年と比べて「とてもそう思う」+「まあそう思う」の 5.0ポイント以上の増加をあらわす。

●地位達成の意欲が高まる

次に、地位達成や競争の意識をみていく(図4-3-2)。

はじめに、自分自身の地位達成の意欲はどうだろうか。「将来、一流の会社に入ったり、一流の仕事につきたい」という職業に関する地位達成意欲をみると、小・中・高校生とも2006年から2015年に「そう思う」が増加している。小学生では11.0ポイント、中学生では8.8ポイント、高校生では11.0ポイントの増加である。

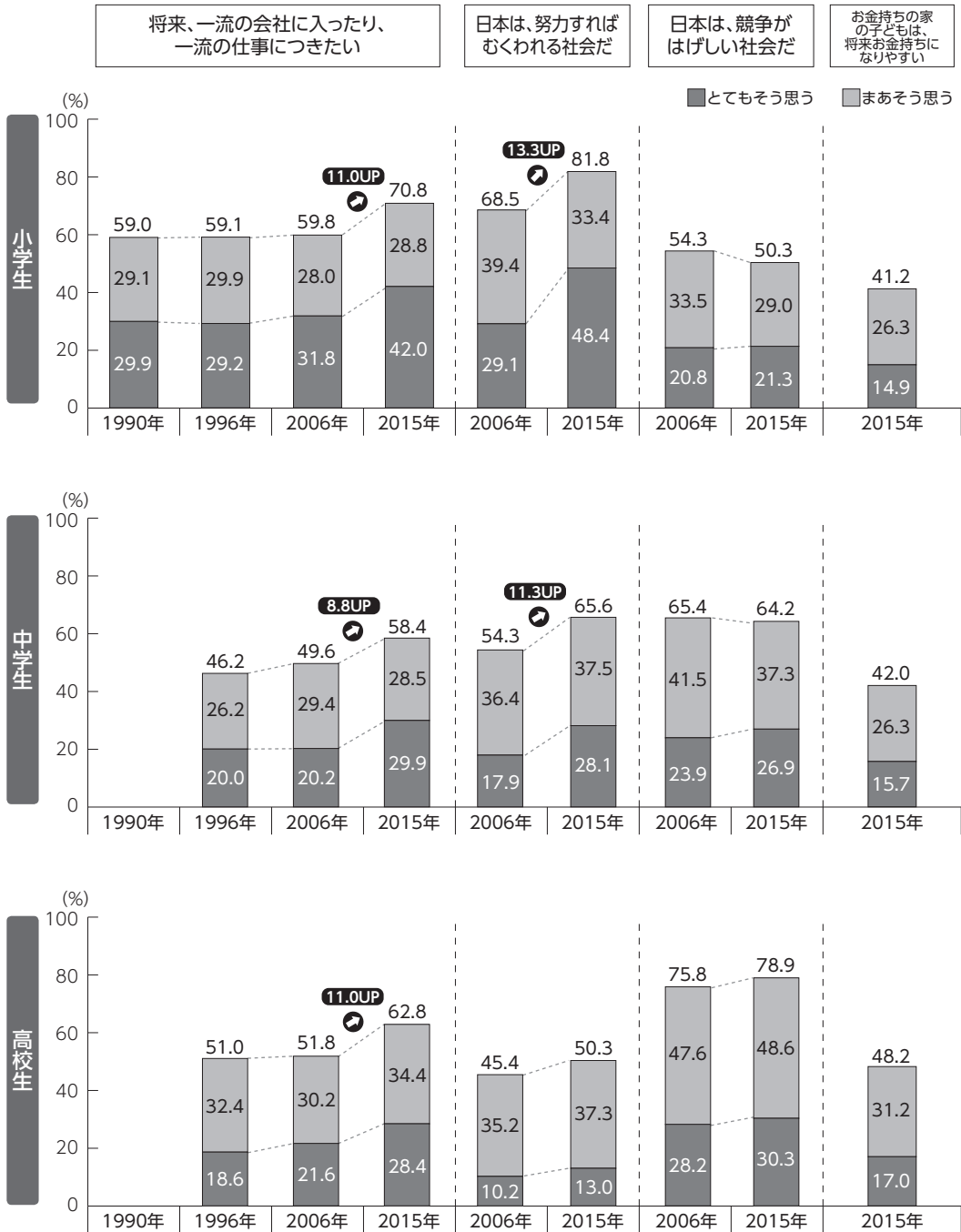
それでは、自分自身に限らず、社会一般における地位達成や競争についてはどのように考えているだろうか。「日本は、努力すればむくわれる社会だ」をみると、小・中・高校生とも2006年と比べて「そう思う」が増加している。小学生では13.3ポイント、中学生では4.9ポイント、高校生では11.3ポイントの増加である。

一方、「日本は、競争がはげしい社会だ」は上記の2項目のような増加はみられない。小学生では4.0ポイントの減少、中学生では1.2ポイントの減少、高校生では3.1ポイントの増加である。とくに小・中学生において、地位達成の意欲が高まっているが、「競争がはげしい」という認識は広がっていないようである。

小・中・高校生を比較すると、「将来、一流の会社に入ったり、一流の仕事につきたい」「日本は、努力すればむくわれる社会だ」は小学生がもっとも高く、一方、「日本は、競争がはげしい社会だ」「お金持ちの家の子どもは、将来お金持ちになりやすい」は高校生がもっとも高い。地位達成意欲や努力を通じた成功というある種楽観的な意識は小学生が比較的高く、競争や格差の固定化への認識は高校生が比較的高いという傾向がある。

Q あなたは、次の意見をどう思いますか。

図4-3-2 社会観・将来観 [地位達成や競争の意識] (小学生・中学生・高校生、経年比較)



注1) グラフのない調査年はたずねていない。

注2) ● は2006年と比べて「とてもそう思う」+「まあそう思う」の5.0ポイント以上の増加をあらわす。

●ジェンダー意識は大きな変化なし

最後に、勉強に即してジェンダー意識をたずねた結果をみていく（図4-3-3）。

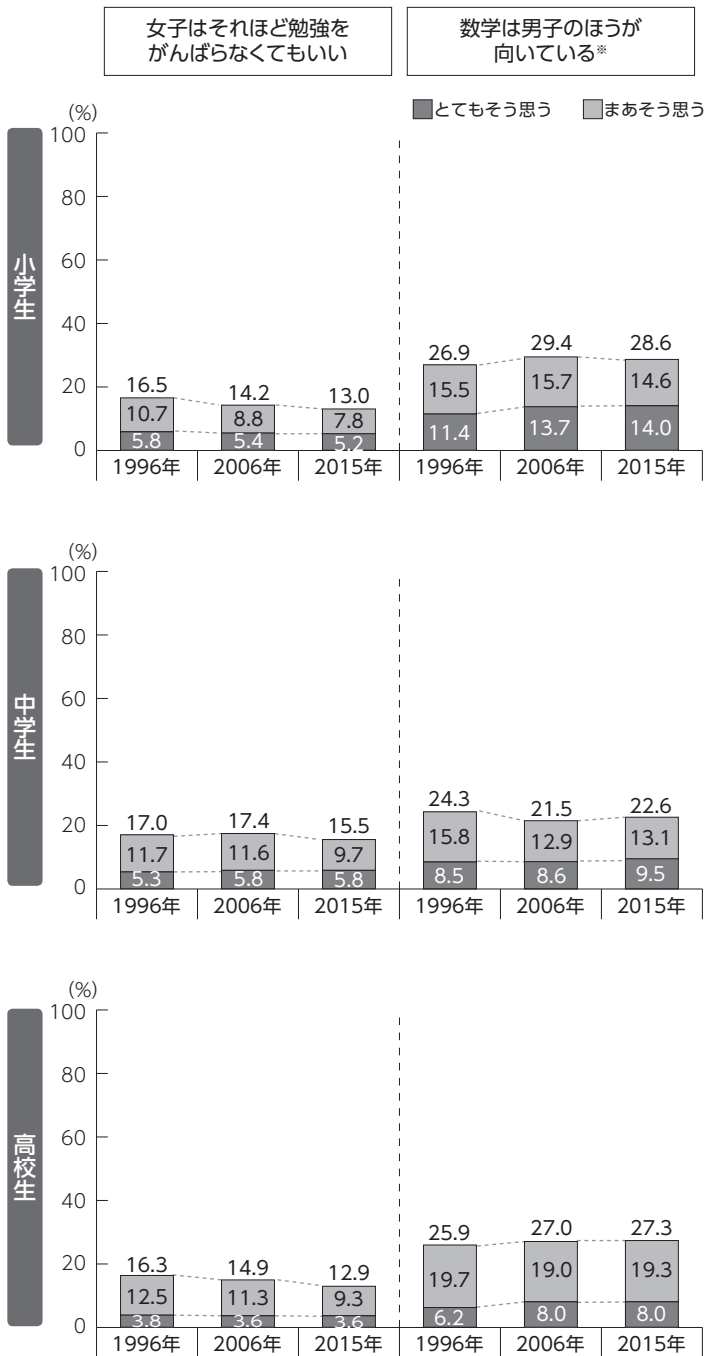
「女子はそれほど勉強をがんばらなくてもいい」は2015年に小学生の13.0%、中学生の15.5%、高校生の12.9%が「そう思う」

としている。また、「算数（数学）は男子のほうが向いている」は小学生の28.6%、中学生の22.6%、高校生の27.3%が「そう思う」としている。

経年比較をみると、いずれの項目も1996年から2015年にかけて大きな変化はない。

Q あなたは、次の意見をどう思いますか。

図4-3-3 社会観・将来観 [ジェンダー意識] (小学生・中学生・高校生、経年比較)



注 1) グラフのない調査年はたずねていない。

注 2) ※は小学生には「算数は男子のほうが向いている」として、1996年には「算数は男子のほうが、国語は女子のほうが向いている」としてたずねている。中学生・高校生には「数学は男子のほうが向いている」として、1996年には「数学は男子のほうが、国語は女子のほうが向いている」としてたずねている。

4

興味・関心の広がり

小・中学生の教科の内容に関する興味・関心は高まっている。一方、高校生は一部の項目を除いて横ばいとなっている。小・中・高校生のいずれにおいても、「『すばらしい』とか『ふしぎだな』と感じる」などの「感じる」ことに比べて「話したり、手紙やメールなどを書いたりしてみたい」「調べたり考えたりするのが好きだ」といった具体的な行動をともなった興味・関心の広がりには少ない。また、中・高校生は教科によって興味・関心の広がりには差がある。

本節では、教科の学習に対して小・中・高校生がどのような興味・関心の広がりを持っているかをみていく。

●小学生の興味・関心の広がり

図4-4-1は小学生の興味・関心の広がりについて示している。はじめに2015年の結果をみると、「世界には貧困や差別に苦しんでいる人々がたくさんいるんだと感じる」(84.2%、「よくある」+「時々ある」、以下同)、「生き物や自然を『すばらしい』とか『ふしぎだな』と感じる」(83.3%)が8割以上など、すべての項目で半数を超える小学生が興味・関心の広がり「ある」としている。

項目の内容をくわしくみていくと、「『すばらしい』とか『ふしぎだな』と感じる」などの「感じる」ことについては比較的「ある」が多く、「手紙やメールなどを書いたりしてみたい」「調べたり考えたりするのが好きだ」「考えたりくふうしたりするのが好きだ」な

どの具体的な行動をともなう項目は比較的「ある」が少ない。

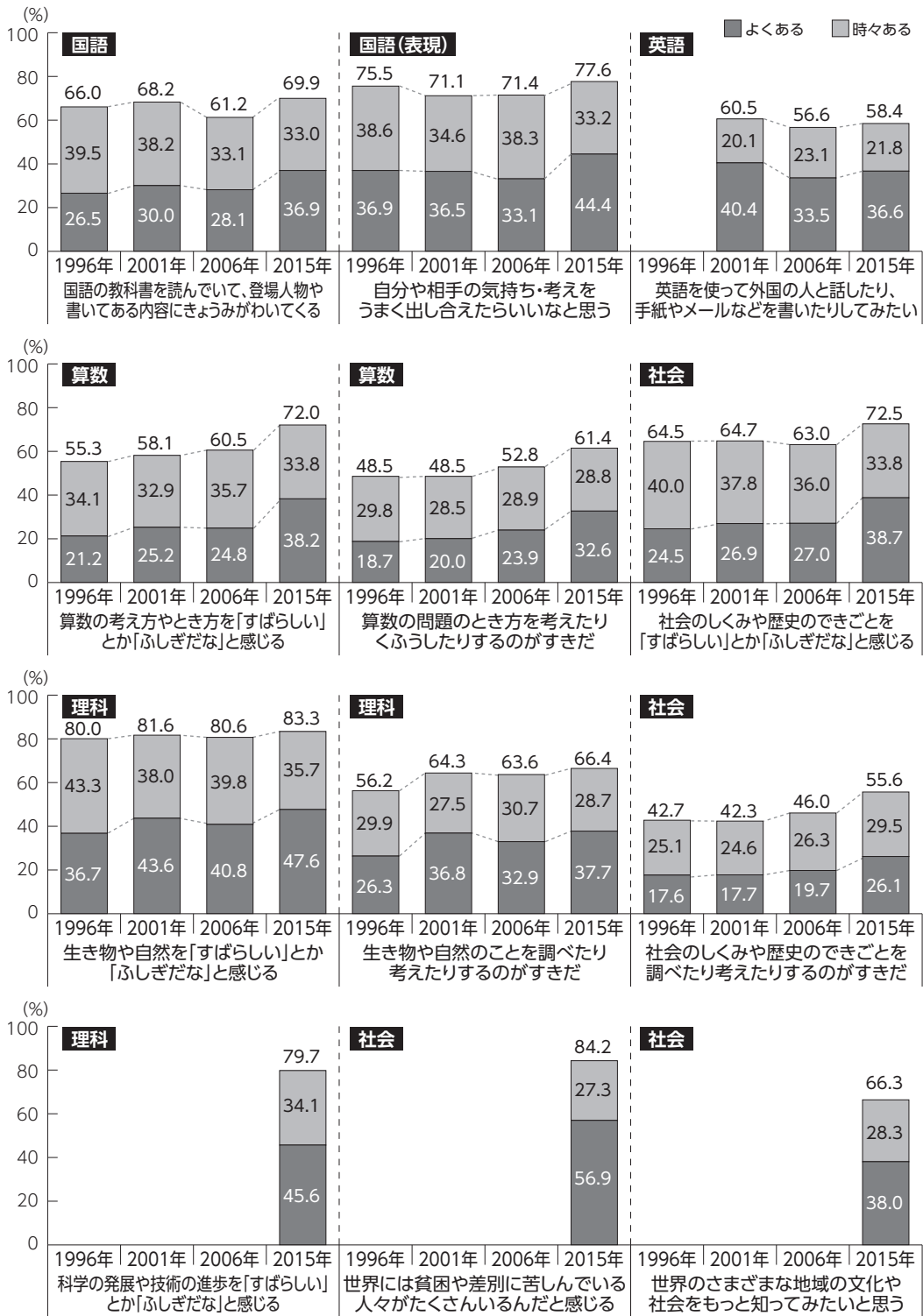
つづいて経年比較をみると、多くの項目で2006年と比べて「ある」が5.0ポイント以上増加しており、「算数の考え方やとき方を『すばらしい』とか『ふしぎだな』と感じる」が11.5ポイント増加、「社会のしくみや歴史のできごとを調べたり考えたりするのが好きだ」が9.6ポイント増加、「国語の教科書を読んでいて、登場人物や書いてある内容にきょうみがわいてくる」が8.7ポイント増加などとなっている。「生き物や自然を『すばらしい』とか『ふしぎだな』と感じる」については「よくある」が6.8ポイント増加している。

そのような中、2006年と比べてほとんど変化していないのは「英語を使って外国の人と話したり、手紙やメールなどを書いたりしてみたい」「生き物や自然のことを調べたり考えたりするのが好きだ」である。



あなたは勉強していて、つぎのように感じることがありますか。

図4-4-1 興味・関心の広がり (小学生、経年比較)



注) グラフのない調査年はたずねていない。

●中学生の興味・関心の広がり

図4-4-2は中学生の興味・関心の広がりについて示している。はじめに2015年の結果をみると、「世界には貧困や差別に苦しんでいる人々がたくさんいるんだと感じる」(86.5%)、「自分や相手の気持ち・考えをうまく出し合えたらいいなと思う」「科学の発展や技術の進歩を『すばらしい』とか『ふしぎだな』と感じる」(ともに74.4%)の順に多い。

項目の内容をくわしくみていくと、「英語を使って外国の人と話したり、手紙やメールなどを書いたりしてみたい」(47.6%)、「数学の問題の解き方を考えたり工夫したりするのが好きだ」(50.0%)、「生き物や自然のことを調べたり考えたりするのが好きだ」(49.4%)、「社会のしくみや歴史のできごとを調べたり考えたりするのが好きだ」(50.3%)など、具体的な行動をともなった項目は比較的「ある」が少なく、50%前後にとどまっている。

また、『すばらしい』とか『ふしぎだな』と感じる』などの「感じる」ことについて、教科別にみると、理科(「科学の発展や技術の進歩を『すばらしい』とか『ふしぎだな』

と感じる」[74.4%)、「生き物や自然を『すばらしい』とか『ふしぎだな』と感じる」[71.6%)や社会(「社会のしくみや歴史のできごとを『すばらしい』とか『ふしぎだな』と感じる」[64.9%)は比較的「ある」が多いのに対し、国語(「国語の教科書を読んでいて、登場人物や書いてある内容に興味がわいてくる」[57.1%)や数学(「数学の考え方や解き方を『すばらしい』とか『ふしぎだな』と感じる」[55.3%)は比較的「ある」とする回答が少ない。教科によって興味・関心の広がりには差がみられる。

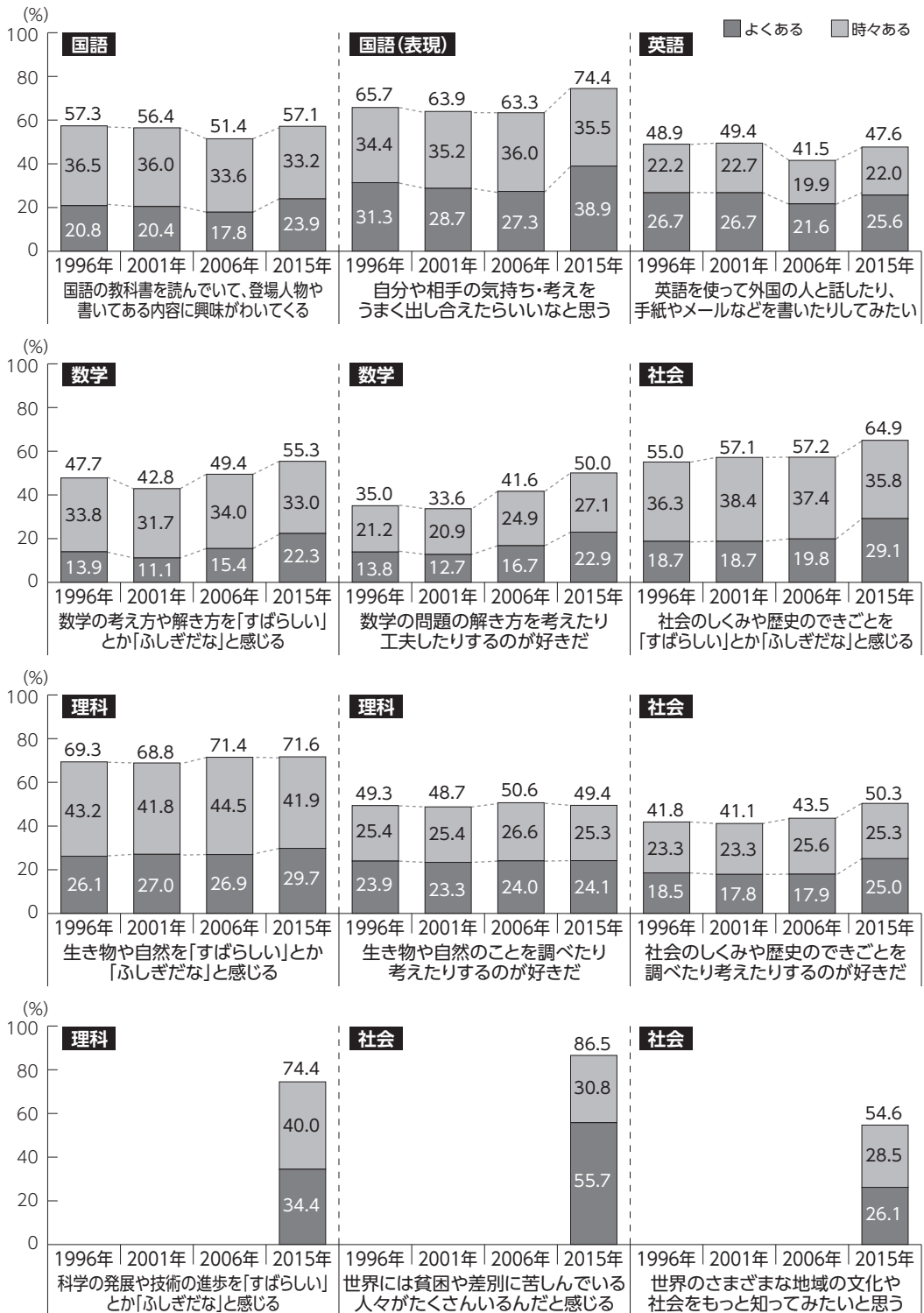
つづいて経年比較をみると、多くの項目が2006年と比べて「ある」という回答が増加しており、「自分や相手の気持ち・考えをうまく出し合えたらいいなと思う」が11.1ポイント増加、「数学の問題の解き方を考えたり工夫したりするのが好きだ」が8.4ポイント増加などとなっている。

そのような中、2006年と比べてほとんど変化していないのは理科に関する興味・関心(「生き物や自然を『すばらしい』とか『ふしぎだな』と感じる」「生き物や自然のことを調べたり考えたりするのが好きだ」)である。



あなたは勉強していて、次のように感じることはありませんか。

図4-4-2 興味・関心の広がり (中学生、経年比較)



注) グラフのない調査年はたずねてない。

●高校生の興味・関心の広がり

図4-4-3は高校生の興味・関心の広がりについて示している。はじめに2015年の結果をみると、「世界には貧困や差別に苦しんでいる人々がたくさんいるんだと感じる」(86.3%)、「自分や相手の気持ち・考えをうまく出し合えたらいいなと思う」(79.1%)、「科学の発展や技術の進歩を『素晴らしい』とか『ふしぎだな』と感じる」(73.9%)の順に多い。

項目の内容をくわしくみていくと、「英語を使って外国の人と話したり、手紙やメールなどを書いたりしてみたい」(55.4%)、「数学の問題の解き方を考えたり工夫したりするのが好きだ」(49.1%)、「生き物や自然のことを調べたり考えたりするのが好きだ」(44.9%)、「社会のしくみや歴史のできごとを調べたり考えたりするのが好きだ」(49.9%)など、具体的な行動をともなった項目は比較的「ある」が少なく、50%前後にとどまっている。

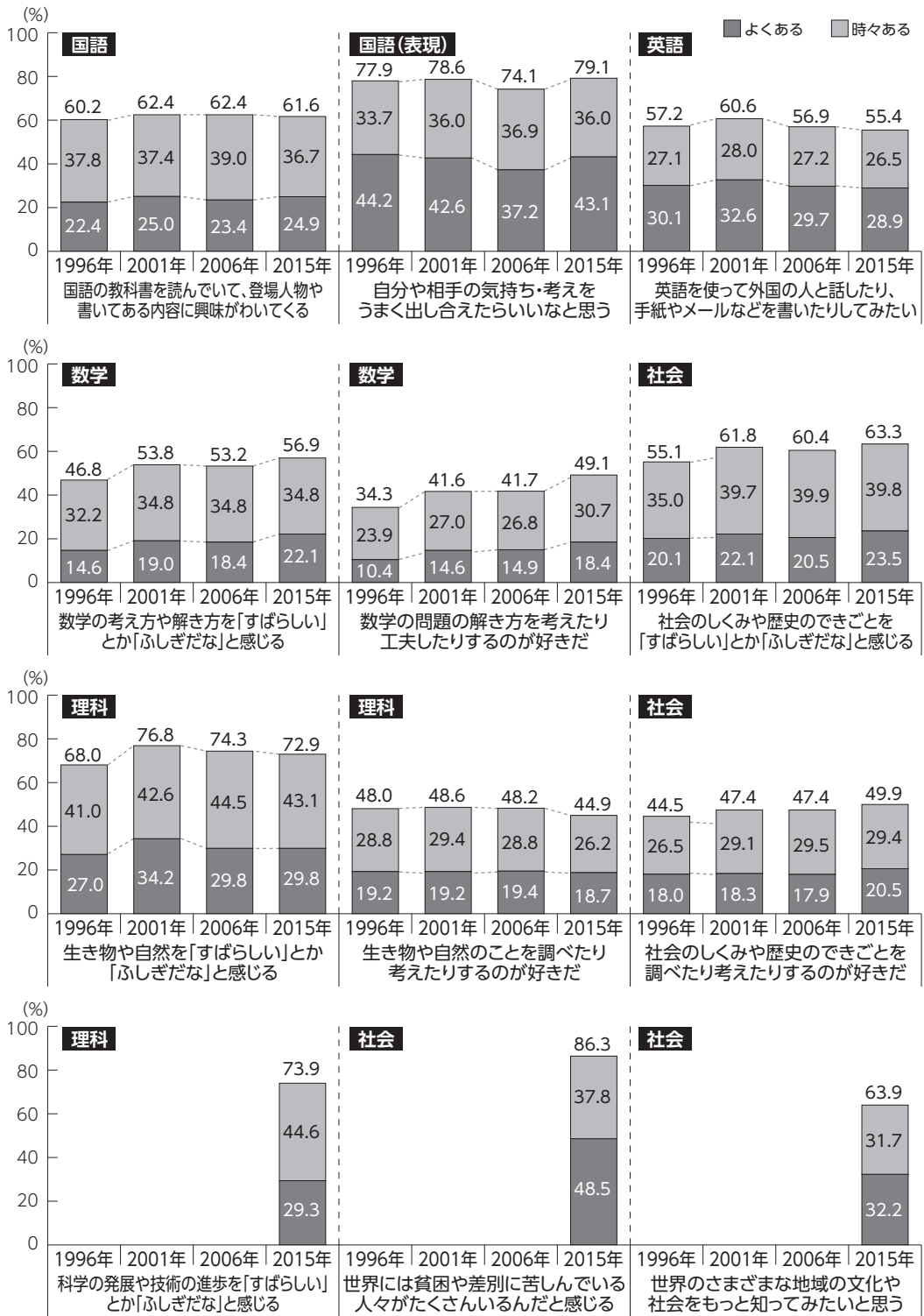
また、「『素晴らしい』とか『ふしぎだな』と感じる」などの「感じる」ことについて、教科別にみると、理科（「科学の発展や技術の進歩を『素晴らしい』とか『ふしぎだな』と感じる」[73.9%]、「生き物や自然を『素晴らしい』とか『ふしぎだな』と感じる」[72.9%]）は比較的「ある」が多いのに対し、数学（「数学の考え方や解き方を『素晴らしい』とか『ふしぎだな』と感じる」[56.9%]）は比較的「ある」が少ない。教科によって興味・関心の広がりには差がみられる。

つづいて経年比較をみると、小・中学生とは異なり、高校生については多くの項目で「ある」という回答は横ばいである。そのような中でも、2006年と比べて一部の項目では増加がみられ、「数学の問題の解き方を考えたり工夫したりするのが好きだ」が7.4ポイント増加、「自分や相手の気持ち・考えをうまく出し合えたらいいなと思う」が5.0ポイント増加となっている。



あなたは勉強していて、次のように感じることはありますか。

図4-4-3 興味・関心の広がり（高校生、経年比較）



注) グラフのない調査年はたずねていない。

5

学習の悩み

小・中・高校生とも「わかりやすい授業にしてほしい」という学習の悩みが減少している。小・中・高校生とも授業に対する理解度は上がっていることから、以前よりも授業のわかりやすさに満足していると考えられる。それ以外の項目では、2006年と比べて小学生は多くの項目で横ばい、高校生は一部減少している。一方、中学生は「小学校までにもっと勉強しておけばよかった」や「自分は生まれつき頭が悪いのではないかと思う」といった学習の悩みが増えている。

本節では、学習について小・中・高校生がどのような悩みをもっているかをみていく。

●小学生の学習の悩み

表4-5-1は小学生の学習の悩みについて示している。はじめに2015年の結果をみると、「テストで間違えるとくやしいと思う」(75.6%)、「どうしてもすきになれない科目がある」(59.6%)は他の項目と比べて高い。勉強の内容や方法に関する悩みは、「おぼえなければいけないことが多すぎる」(35.6%)、「上手な勉強のしかたがわからない」(31.4%)について3割強の小学生が悩みとしている。一方、「何のために勉強しているのかわからない」(8.0%)と勉強の意味に疑問を感じている小学生は少ない。

つづいて経年比較をみると、比較的变化が大きいのは「わかりやすい授業にしてほしい」が2006年(33.3%)と比べて5.7ポイント減少、もっとも多い1990年(43.6%)と比べて16.0ポイント減少の27.6%となっている。図1-2-1(p.57)でみたように、小学生の授業の理解度が上がっていることをふまえると、小学生は以前より授業のわかりやすさに満足していると考えられる。

●小学生の学習の意欲

小学生には学習の悩みと合わせて学習の意

欲をたずねている。はじめに2015年の結果をみると、「もっと成せきをよくしたい」(81.7%)、「問題がとけたり、何かがわかるとうれしい」(79.6%)が8割前後で高い。

つづいて経年比較をみると、「もっと成せきをよくしたい」「問題がとけたり、何かがわかるとうれしい」「新しいことを知るのがすきだ」の3項目では大きな変化がなく横ばいであるが、「勉強で友だちに負けたくない」は2006年(56.8%)と比べて5.4ポイント減少の51.4%となっている。

以上のように、小学生の学習の意欲は大きく変化していないか、「友だち」との競争に対する意識について減少している。このような結果は、図4-1-1でみた勉強は大切で成績を上げたいという意識の変化、また図4-4-1でみた教科の内容に関する興味・関心が広がっているという変化と不一致にみえる。成績に関する意識については、進学と関連して「できるだけいい高校や大学に入れるよう成せきをあげたい」としたたずね方と現状の成績と比較して「もっと成せきをよくしたい」としたたずね方のちがいがあある。また、興味・関心については、教科の内容に関連したたずね方と内容を限定しないたずね方のちがいがあある。以上のような質問の方法によって回答にちがいがでていると考えられる。

Q

あなたは勉強について、つぎのように思うことがありますか。

表4-5-1 学習の悩み・意欲（小学生、経年比較）

	1990年	1996年	2001年	2006年	2015年	2006年からの変化	
学習の悩み	どうしてもすきになれない科目がある	70.9	65.7	63.7	62.9	59.6	
	上手な勉強のしかたがわからない	38.1	34.6	30.5	30.4	31.4	
	おぼえなければいけないことが多すぎる	43.0	40.0	39.7	35.4	35.6	
	4年生までにもっと勉強しておけばよかった			35.4	31.1	30.5	
	わかりやすい授業にしてほしい	43.6	39.3	41.3	33.3	27.6	↘ 5.7down
	親の期待が大きすぎる				15.3	14.7	
	何のために勉強しているのかわからない	10.3	11.4	12.6	8.9	8.0	
	テストで間違えるとくやしいと思う					75.6	
学習の意欲	もっと成せきをよくしたい	81.3	78.2	80.3	78.7	81.7	
	問題がとけたり、何かがわかるとうれしい	80.1	82.3	81.0	80.1	79.6	
	新しいことを知るのがすきだ	58.1	55.7	62.3	60.0	59.5	
	勉強で友だちに負けたくない	60.0	55.2	55.5	56.8	51.4	↘ 5.4down

注1) 複数回答。

注2) 数値のない調査年はたずねていない。

注3) 「2006年からの変化」は、5.0ポイント以上の変化を示す。

●中学生の学習の悩み

表4-5-2は中学生の学習の悩みについて示している。はじめに2015年の結果をみると、「テストで間違えるとくやしいと思う」(76.3%)、「どうしても好きになれない科目がある」(70.9%)、「上手な勉強の仕方がわからない」(67.0%)の順に高い。

つづいて経年比較をみると、2006年と比べて多くの項目でさほど大きな変化はないが、「小学校までにもっと勉強しておけばよかった」が5.0ポイント増加の43.0%、「自分は生まれつき頭が悪いのではないかと思う」が5.7ポイント増加の42.0%となっている。また、「もっと科目の数を減らしてほしい」という中学生が2006年(35.2%)と比べて5.1ポイント増加の40.3%となっている。

「親」や「先生」といった周囲の大人をど

のように考えているかをみると、「親の期待が大きすぎる」が2006年(23.7%)と比べて3.6ポイントとわずかに増加し27.3%だが、「先生は成績にこだわりすぎる」は2006年(21.0%)と比べて3.4ポイントとわずかに減少、もっとも多い1990年(31.6%)と比べて14.0ポイント減少し17.6%となっている。

授業についての悩みをみると、「わかりやすい授業にしてほしい」が2006年と比べて11.1ポイント減少、もっとも多い2001年と比べて12.0ポイント減少の40.2%となっている。図1-2-2(p.58)でみたように、小学生と同様に中学生も授業の理解度が上がっていることをふまえると、以前より授業のわかりやすさに満足していると考えられる。

Q あなたは勉強について、次のように思うことがありますか。

表4-5-2 学習の悩み（中学生、経年比較）

	1990年	1996年	2001年	2006年	2015年	2006年からの変化
どうしても好きになれない科目がある	69.5	67.9	73.2	72.0	70.9	
上手な勉強の仕方がわからない	70.1	66.6	68.8	68.3	67.0	
覚えなければいけないことが多すぎる	54.6	57.4	63.0	56.9	59.0	
努力しても成績が思うように上がらない	38.1	40.2	41.6	46.6	47.6	
こつこつと努力できないで困る	60.8	54.2	55.7	49.2	47.0	
どうしてこんなことを勉強しなければいけないのかと思う	45.9	49.5	56.5	43.8	43.8	
小学校までにもっと勉強しておけばよかった			41.6	38.0	43.0	↗ 5.0up
自分は生まれつき頭が悪いのではないかと思う	35.4	33.9	38.9	36.3	42.0	↗ 5.7up
世の中に出てから、もっと役に立ちそうな勉強がしたい	41.8	40.8	48.7	43.3	41.9	
もっと科目の数を減らしてほしい	34.2	38.9	44.4	35.2	40.3	↗ 5.1up
わかりやすい授業にしてほしい	42.2	44.2	52.2	51.3	40.2	↘ 11.1down
勉強する科目を自分でもっと選択できるといい	40.4	39.6	45.7	38.8	37.5	
親の期待が大きすぎる	26.1	26.9	25.0	23.7	27.3	
よい参考書や問題集が見つからない	16.0	14.0	15.7	17.9	21.7	
先生は成績にこだわりすぎる	31.6	28.2	21.9	21.0	17.6	
テストで間違えるとくやしいと思う					76.3	

注 1) 複数回答。

注 2) 数値のない調査年はたずねていない。

注 3) 「2006年からの変化」は、5.0ポイント以上の変化を示す。

●高校生の学習の悩み

表4-5-3は高校生の学習の悩みについて示している。はじめに2015年の結果をみると、「テストで間違えるとくやしいと思う」(66.0%)、「どうしても好きになれない科目がある」(62.6%)、「上手な勉強の仕方がわからない」(62.5%)の順に高い。

つづいて経年比較をみると、2006年と比べ、「わかりやすい授業にしてほしい」が2006年と比べて10.0ポイント減少の41.2%、「世の中に出てから、もっと役に立ちそうな勉強が

したい」が9.1ポイント減少の41.5%、「どうしてこんなことを勉強しなければいけないのかと思う」が9.6ポイント減少の44.9%、「よい参考書や問題集が見つからない」が5.0ポイント減少の8.6%、「こつこつと努力できないで困る」が4.5ポイント減少の57.3%、「上手な勉強の仕方がわからない」が4.2ポイント減少の62.5%となっており、高校生の学習に関する悩みは2006年と比べて減少している。

Q あなたは勉強について、次のように思うことがありますか。

表4-5-3 学習の悩み（高校生、経年比較）

	1990年	1996年	2001年	2006年	2015年	2006年からの変化
どうしても好きになれない科目がある	56.5	58.8	61.0	64.9	62.6	
上手な勉強の仕方がわからない	61.9	64.4	64.2	66.7	62.5	
覚えなければいけないことが多すぎる	56.6	59.5	55.8	58.4	57.8	
努力しても成績が思うように上がらない	21.9	24.9	24.3	29.5	29.7	
こつこつと努力できないで困る	63.0	65.5	60.5	61.8	57.3	
どうしてこんなことを勉強しなければいけないのかと思う	56.8	64.4	55.5	54.5	44.9	⇩ 9.6down
中学校までにもっと勉強しておけばよかった			22.1	28.7	30.5	
自分は生まれつき頭が悪いのではないかと思う	20.6	20.7	20.5	23.2	24.4	
世の中に出てから、もっと役に立ちそうな勉強がしたい	51.1	52.8	49.6	50.6	41.5	⇩ 9.1down
もっと科目の数を減らしてほしい	32.4	36.7	30.7	34.1	30.9	
わかりやすい授業にしてほしい	34.3	45.2	50.5	51.2	41.2	⇩ 10.0down
勉強する科目を自分でもっと選択できるといい	39.1	40.3	31.4	29.6	28.3	
親の期待が大きすぎる	20.2	16.1	12.3	13.4	14.3	
よい参考書や問題集が見つからない	16.8	12.5	12.6	13.6	8.6	⇩ 5.0down
先生は成績にこだわりすぎる	27.5	26.6	14.1	16.2	14.5	
テストで間違えるとくやしいと思う					66.0	

注 1) 複数回答。

注 2) 数値のない調査年はたずねていない。

注 3) 「2006年からの変化」は、5.0ポイント以上の変化を示す。

6

自分自身の成績に対する見方

1990年からの25年間で、自分自身の成績を上位と考える小学生が増加し、「まん中」あるいは下位と考える小学生は減少している。また、1990年から2001年にかけて、自分自身の成績を上位と考える高校生が減少し、下位と考える高校生が増加している。

本節では、第1節の成績観・学力観とは異なる3つの側面でたずねた自分自身の成績に対する見方をみていく。1つ目は「クラスの中」あるいは「学年の中」での「総合的な成績」（以下、成績の自己評価）である。2つ目は「どのくらいの成績がとれたらいい」と思うか（以下、とりたいと思う成績）である。3つ目は「うんとかんばれば、どのくらいの成績がとれる」と思うか（以下、がんばればとれると思う成績）である。

●小学生の成績に対する見方

図4-6-1は小学生が自分自身の成績をどのようにみているかの結果である。

成績の自己評価については、自分自身を上位（「1（上のほう）」＋「2」＋「3」）と考える小学生は1990年と比べて8.1ポイント増加している。一方、自分自身を「4（まん中）」と考える小学生は1990年と比べて4.3ポイント減少し、下位（「5」＋「6」＋「7（下のほう）」）と考える小学生も1990年と比べて5.2ポイント減少している。このような変化は1990年から2015年にかけて少しずつ進んできたようである。

とりたいと思う成績、がんばればとれると思う成績については、大きな変化はみられない。

●中学生の成績に対する見方

図4-6-2は中学生が自分自身の成績を

どのようにみているかの結果である。成績の自己評価、とりたいと思う成績、がんばればとれると思う成績のいずれにおいても、大きな変化はみられない。

●高校生の成績に対する見方

図4-6-3は高校生が自分自身の成績をどのようにみているかの結果である。

成績の自己評価については、1990年から2001年にかけて、自分自身の成績を上位（「1（上のほう）」＋「2」＋「3」）と考える高校生が11.1ポイント減少し、下位（「5」＋「6」＋「7（下のほう）」）と考える高校生が10.9ポイント増加するという変化が生じている。その後については、高校生の自分自身の成績に対する見方に大きな変化はみられない。また、とりたいと思う成績については、「1（上のほう）」が1990年（43.7%）から2015年（34.8%）にかけて8.9ポイント減少している。

一方、がんばればとれると思う成績については、大きな変化はみられない。

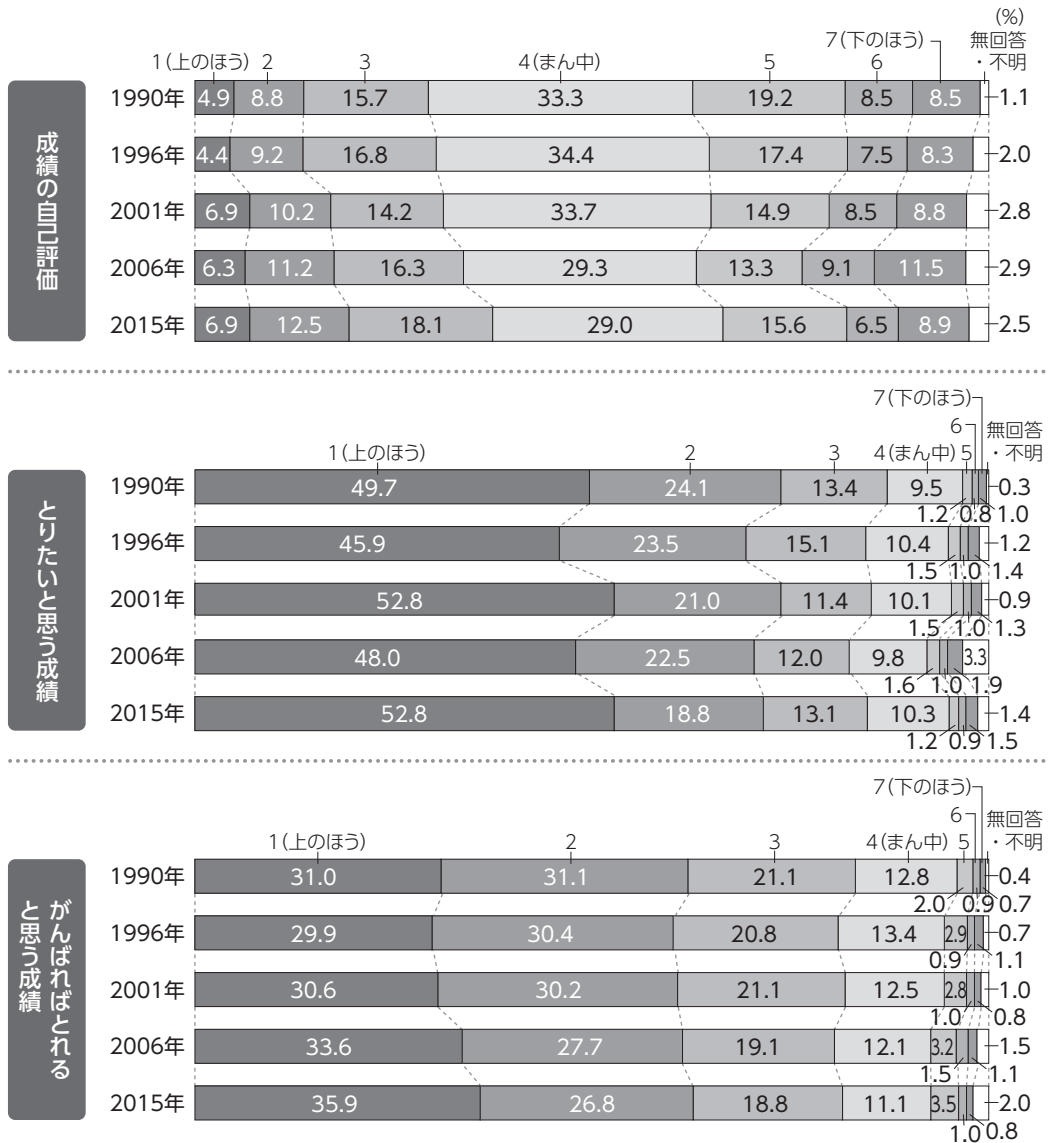
以上のように、小・中・高校生の自分自身の成績に対する見方をみると、勉強は大切で成績をあげたいという意識が広がっている（図4-1-1）のとは対照的に、とりたいと思う成績が高くなっているという傾向はみられなかった。

Q あなたの今の成せきは、クラスの中でどのくらいですか。

Q あなたは、どのくらいの成せきがとれたらいいと思いますか。

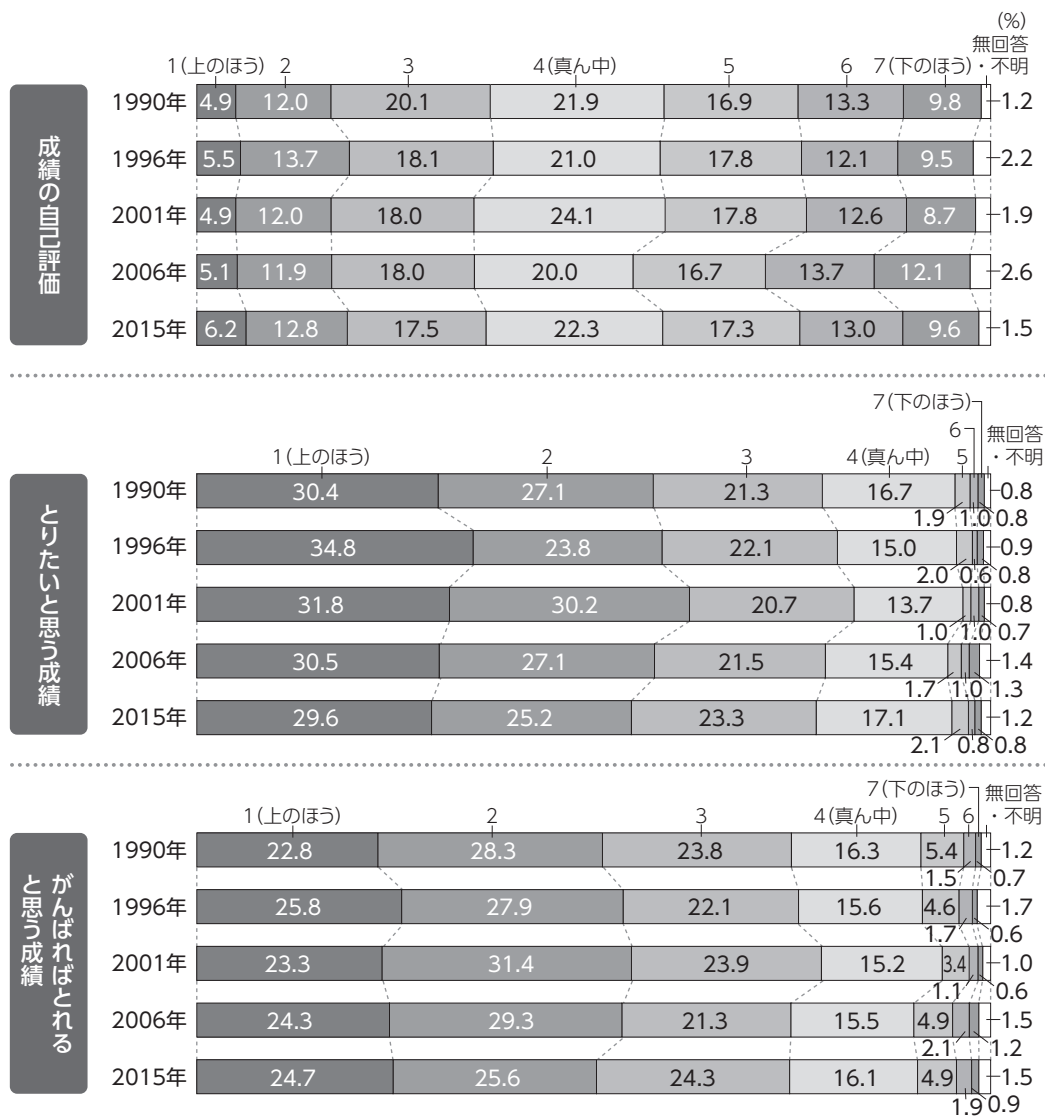
Q それでは、今の成せきは別として、あなたがうんとがんばれば、どのくらいの成績がとれると思いますか。

図4-6-1 自分自身の成績に対する見方（小学生、経年比較）



- Q** 現在の総合的な成績は、学年の中でどのくらいですか。
- Q** あなたはどのくらいの成績がとれたらいいと思いますか
- Q** それでは、現在の成績は別として、あなたがうんとがんばれば、どのくらいの成績がとれると思いますか。

図4-6-2 自分自身の成績に対する見方（中学生、経年比較）



Q 現在の総合的な成績は、学年の中でどのくらいですか。

Q あなたはどのくらいの成績がとれたらいいと思いますか

Q それでは、現在の成績は別として、あなたがうんとがんばれば、どのくらいの成績がとれると思いますか。

図4-6-3 自分自身の成績に対する見方（高校生、経年比較）

